

楽曲解説

今回演奏させていただく作曲家、スメタナ、サン＝サーンス、シューベルトは、それぞれ1824年、1835年、1797年に誕生している。日本でいえば、第11代将軍徳川家斉の時代（1787年～1837年）である。わかりやすく言うと、松平定信率いる隠密同心が活躍するテレビドラマ「大江戸捜査網」の時代である。また、ドビュッシー（Claude Debussy）の交響詩『海』やラヴェル（Maurice Ravel）の『海原の小舟』などの西洋音楽に「ジャポニズム」として多大な影響を与えた『富嶽三十六景 神奈川沖浪裏』でおなじみの葛飾北斎が活躍したのもこの時代である。

1. 歌劇『売られた花嫁』 序曲（スメタナ）

作曲者のベドルジフ・スメタナ（Bedřich Smetana）は、1824年3月2日、ボヘミア地方の中心都市プラハの東に位置するリトミシュルで生まれた、チェコの作曲家、指揮者、ピアニストである。

音楽のキャリアは、「作曲もできるピアニスト」としてスタートした。チェコでの評判は良くなかったが、スウェーデンにおいて行ったコンサートで大絶賛され、指揮者としてのキャリアもスタートさせた。

しかし、祖国への思いが強くなり、プラハへ戻ると、歌劇場の建設が始まっていた。これが、スメタナに歌劇を作曲させる機会を与えた。本日演奏する『売られた花嫁』は、完成した8曲の歌劇のうちの第2作目である。

喜劇（ブッフア）に分類される『売られた花嫁』のあらすじは・・・（一部、脚色あり）

舞台はボヘミアの農村。主な登場人物は、村娘のマルジェンカ、出生の知れない若者のイエニーク、村の大富豪のミーハ、その息子のヴァシエク、結婚仲介人のケツアルである。

マルジェンカとイエニークは、結婚を前提としたお付き合いをしている。

イエニークがマルジェンカの**家に行くと**両親からは「素性のわからない輩に、娘は嫁がせない！」と結婚を反対された。

それを知ったケツアルは、マルジェンカの両親に、村の大富豪ミーハの息子ヴァシエクを紹介した。嫁ぎ先としては願ったり叶ったりで、彼らは諸手を挙げての大賛成である。

ところが、マルジェンカにとっては、結婚相手はイエニーク以外には考えられない。

そこで、ケツアルは、イエニークに対して、大金を渡すから、マルジェンカとヴァシエクが結婚できるような誓約書を書くように依頼した。そしてイエニークは、金銭を受け取って『マルジェンカの結婚相手は、ミーハの息子たる者のみ』と記した。

それを見たマルジェンカは、驚愕し、「私は**「売られた」**！」と大騒ぎである。

ところがである。その場にやってきたミーハがイエニークを見るなり・・・・・・

「先妻との間にできた、生き別れた息子だ！」と言い出す。

そして、イエニークは言った。「誓約書どおり、ミーハの息子たる自分がマルジェンカと

結婚する！」

めでたしめでたしい!(^^)!

序曲はというと、2分の2拍子のへ長調で書かれている。速度標記は、なんと **Vivacissimo** で、実に **Moderato** (ほどよい速さ) の2倍以上の、猛スピードで快活な演奏が要求される。

「喜劇が始まりますよ！」的な導入の後、弦楽器が弱音でフーガのようなフレーズを演奏する。その後、いかにもボヘミア的なメロディーやリズムが現れる。晩年の作品の数々を思い起こさせるような音楽である。

なお、スメタナはその後、難聴に悩まされ、50歳の秋には両耳の聴覚を失うという中途失聴者となってしまった。しかし、「モルダウ」で有名な連作交響詩『わが祖国』や弦楽四重奏曲『わが生涯より』など、世界的にポピュラーな珠玉の名曲は、失聴以降に完成されたものが多い。

そんなスメタナは、チェコ国民楽派の父と称され、彼の命日である5月12日に『わが祖国』をオープニングの演目として開催されるのが、「プラハの春音楽祭」である。

2. チェロ協奏曲第1番 イ短調 作品33 (サン=サーンス)

作曲者のカミーユ・サン=サーンス (Camille Saint-Saëns) は、1835年10月9日にパリで生まれた、フランスの作曲家、オルガニスト、ピアニストである。

早くから音楽の才能を発揮し、13歳でパリ音楽院に入学して、オルガンと作曲を学んだ。

そののち、18歳でサン・メリー教会、22歳でマドレーヌ教会という、どちらも美味しそう・・・ではなく、権威のある教会のオルガン奏者に就任した。

サン=サーンスが作曲したチェロのための曲といえば、1886年に発表した組曲『動物の謝肉祭』の第13曲「白鳥」が圧倒的に有名だが、「チェロソナタ第1番 ハ短調」、「ロマンス へ長調」、「アレグロ・アパッショナート ロ短調」などが、このチェロ協奏曲第1番と同時期に作曲されている。余談であるが、「ロマンス」というのは、誰かへの恋愛感情や色恋沙汰を表現しているのではなく、「器楽のための抒情的な歌曲」というジャンルのことである。

さて、本題のチェロ協奏曲だが、サン=サーンスは生涯にチェロ協奏曲を2曲完成させた。しかしながら、第2番のほうは作曲者の円熟期(1900年代)に作曲されたにもかかわらず、あまり演奏される機会がない。筆者もその作品に触れたことはなく、「サン=サーンスのチェロコン」といえば、もっぱらこの第1番のことである。

楽曲の構成は、全3楽章となっているが、切れ目なく譜面が書かれていること、第1楽章が完全なソナタ形式となっていないことなどから、3部構成の単一楽章の形式であるともとれる。

第1楽章 アレグロ・ノン・トロppo イ短調 2分の2拍子

はじけるようなオーケストラの和音に続いて独奏チェロが第1主題を奏でる。扉を

開けると一斉に飛び出してくる、小学校の中休みを連想するような音の動きである。一方、第2主題は対照的に、弦楽器の長音符を従えての流麗な旋律となっている。

躍動した短い展開部を経て、再現部となる。その第2主題の再現のあと、切れ目なく第2楽章に入る。

第2楽章 アレグレット・コン・モート 変ロ長調 4分の3拍子

弱音器を装着した弦楽器が、舞曲風な主題を奏でる。独奏チェロがそれに悠然と応える。楽章の中ほどでは、独奏チェロの短い分散和音のカデンツァが挿入される。

続いて、木管楽器で主題が再現されたのち、独奏チェロの応答部分が低音で再現され、切れ目なく第3楽章に入る。

第3楽章 アン・プウ・モワン・ヴィト イ短調 2分の2拍子

まず、第1楽章の第1主題が再現される。その主題の後半部分を独奏チェロが連呼したのちに、そのフレーズをモチーフとした第1主題を提示する。その後、抒情的な主題とは対照的に、独奏チェロの技巧的なフレーズが繰り返される。ヴァイオリンの音階進行による経過部を経て、第2主題となる。穏やかなメロディーであるが、その終結部において独奏チェロは、チェロが出すことのできる最低音から、ヴァイオリン奏者もびっくりの超高音までを順次進行で奏でる。その高音域にはハーモニックスという技法が用いられており、ソリストの見せ場ともなっている。

その後、第1楽章の第1主題や展開部が再現されたのち、イ長調に転じて盛大に全曲が結ばれる。

この曲は、「サンサーンスの作品33つ」。ぜひ、休憩時間中にでも、このカギカッコ内を早口で10回言ってみてほしい。

3. 交響曲第8番 ハ長調《ザ・グレート》DV944 (シューベルト)

作曲者のフランツ・シューベルト (Franz Schubert) は、1797年1月31日にウィーン郊外で生まれた、オーストリアの作曲家である。

サン＝サーンスと同様、幼いころから音楽の才能を発揮し、宮廷少年聖歌隊 (のちのウィーン少年合唱団) に所属するなどした。

シューベルトは一般的に「歌曲の王」と呼ばれ、その600を超える歌曲の数々は音楽史上、極めて重要であるが、生活は苦しく、学校教師をしながらの作曲活動であった。大きな会場での発表という機会にはなかなか恵まれなかったものの、彼の才能を認める友人たちが「シューベルティアード」なる同好会を結成し、そこで多くの作品が発表された。

さて、シューベルトの交響曲については楽曲解説では避けて通れない事項がある。それは、交響曲の採番である。

この、通称「グレート」交響曲は、筆者が生まれたころは「第9番」と呼ばれていた。し

かしながらそれ以前は「第7番」であった。これは当時、「完成した」7曲の交響曲だけに採番したため、完成が一番遅かった「グレート」が第7番となったのである。その後、1950年ごろにオーストリアの音楽学者ドイチュ（Otto Erich Deutsch）が、作曲時期に対応した作品目録を發表し、除かれていた2曲の未完の交響曲（ホ長調（第7番）、ロ短調（第8番：通称「未完成」））を作品に含めたので「グレート」が第9番となり、日本では高度経済成長時代、クラシック愛好家が増えたことと重なり、「グレートといえば第9番！」と認知され、定着した。その後、1980年ごろにドイチュ番号の改定が行われ、「自筆筆で演奏できるもののみが完成された作品である」と定義したため、オーケストレーションされていないホ長調の交響曲が除かれ、結果、「未完成」が第7番、「グレート」は第8番ということになった。しかしながら、定着した「第9番」の呼称は捨てきれず、現在では「第8(9)番」という、カッコ書きを併記する形で「第9番」としての表記を残すこともある。

第1楽章 アレグロ・マ・ノン・トロポ ハ長調 2分の2拍子

まず、序奏（アンダンテ、2分の2拍子）からスタートする。この冒頭においてホルンの奏でる何ともロマンティックな動機の「付点のリズム」がこの曲の全体において重要な役割を果たす。

ほとんど「序曲」のような長い序奏に続けて、「提示部」に入ると、弦楽器がリズムックな第1主題を奏でる。このモチーフも付点のリズムで成り立っている。オーボエとファゴットによって演奏される第2主題も、モチーフの骨格は実は付点のリズムなのである。その後、展開部、再現部を経て、終結部に入るが、序奏のモチーフが断定的に堂々と再現されてこの楽章を終える。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート イ短調 4分の2拍子

弦楽器に導かれて出現するオーボエの主題は、優美でありながらも付点のリズムが効果的に使われている。こういった緩徐楽章こそがシューベルトの真骨頂である。次々と現れるメロディーそして和声展開。お楽しみください。……しかし、長い！

第3楽章 スケルツォ、アレグロ・ヴィヴァーチェ ハ長調 4分の3拍子

同じモチーフが繰り返し現れる点、フォルテ（強奏）とピアノ（弱奏）が交互に出てくる点など、まるで、ブルックナーの交響曲に通じるような楽章である。

イ長調に転じた中間部のトリオでも、伴奏には付点のリズムが多用されている。

第4楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ ハ長調 4分の2拍子

躍動感にあふれた長大な楽章である。シューベルトにしては珍しく、喜びを感じる曲想で、そのせいか途中には、ベートーヴェンの第9交響曲（歓喜の歌）を思わせるようなフレーズも出現する。

コーダは、ほぼ分散和音だけでできているような、単調で単純なものであるが、それを堂々と展開して、1154小節にも及ぶ長大な第4楽章、そして、この大交響曲を締めくくる。

この交響曲は、「長大だ！」ゆえに「The Great」と称されるのであると一般的には言われている。しかしながら、没年に完成したものの演奏されることもなく10年間以上も実兄のところで眠っていた楽譜を発見したのがシューマン (Robert Schumann) であり、初演の指揮者はメンデルスゾーン (Felix Mendelssohn) であった。ドイツ・ロマン派を代表する2人の作曲家が心を動かされ、光を当てた、まさに「偉大な」交響曲なのである。

以 上